

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 4

ビューティフルサンデー 鹿島釣狂

浜厚真漁港

3月末の釣り新聞では、室蘭港や苫小牧港でクロガシラが釣れ始めたとの情報が出た。冬期間は、ワカサギやチカの小物釣りでお茶を濁してきたわけだが、座布団級が釣れるとあっては、出掛けないわけにはいくまい。3月末の平日に休暇があったが、天気予報が芳しくなかった。まあ、慌てる必要は無いだろう。この4月からは、サンデー毎日の身分となるのだ。毎日がビューティフルサンデーなのかどうかは別として・・・。

さわやかな日曜 降り注ぐ太陽

Hey hey hey Its a Beautiful dey

でかけよう磯辺へ 釣りしよう 高らかに

Hey hey hey Its a Beautiful dey

今日は素晴らしいフィッシングデー

きっと 大物が僕を 待っている

60歳の定年退職後も、年金が満額出るようになるまではと、5年間、嘱託職員として勤務してきた。この仕事は全く気楽なものであったが、それなりに勤務時間が設定されており、釣行はどうしても週末とならざるを得なかった。4月からは週末の天気を気にすることもなく、平日でも出掛けられるのだ。そう思うと、わざわざ、天気の悪い日に出掛けることもないだろう。

4月1日、その日がついにやってきた。無職生活1年目の初日である。4時に起床し、5時半には苫小牧西港の南埠頭に着いた。岸壁にサビキ釣り師が等間隔で列を作って並んでお

り、投げ釣りをするスペースは見あたらない。大チカがまさに入れ食いの活況を呈していたのだ。早朝から竿を出していたが、先ほどからようやく大きな回遊があって釣れ盛るようになったとのことだ。しかし、慌てる必要はないだろう。今までなら隙間を見つけてサビキ竿を出してしまうところだが、時間はたっぷりとあるのだ。今日はサンデー毎日の初日である。

6時、旧菱中造船所に向かった。漁港内に向けてチカ釣り師が1名。防波堤先端と直角にそれぞれ1名の投げ釣り師が竿を出していた。アタリはまだ1度もないという。私はその中間でゆっくりと竿を準備した。さあ、今年の投げ釣り第1投目である。ビシッと力強く竿を振った。しかし、仕掛が前に飛んでいかなかった。ベキッと音がしてプロサーフCXの元竿から2本目の先がブラリと垂れ下がってしまったのだ。

リールベールが返っていなかった。記念すべき1投目がこんな体たらくなのだ。何が慌てる必要はないだろうだって？ 時間はたっぷりあるだって？ 情けなくなる。その後2本のプロサーフを出したが、待てども待てどもアタリは1度も出なかった。10時、先端の釣り人が引き上げ出したのを切っ掛けに私も竿を仕舞った。

11時、浜厚真漁港と周分埠頭の間の中砂浜で竿を出した。ここも実績のあるクロガシラ場だ。砂浜なので今度は25号の赤サーフを3本出した。やはりアタリは出ない。海藻がやたらと仕掛にまとわりついてくる。

12時、竿をそのままにして浜厚真漁港を偵察した。春先のクロガシラでは1番の実績があるところで、いつもは竿を出すことが出来ない所に一人分のスペースが空いていた。美唄から来たという釣り人に話を聞いた。「菱中造船所はまだ先の話だ。4月中旬くらいからよくなっていく。ここも3月中旬の一時期はよかったけれど、最近は低迷している。先週、40cm以上を4枚釣ったので、再度来てみた。今日は1枚釣っただけ。」と携帯に残した先週の画像とフラシに入れた35cmほどのクロガシラを見せてくれた。その先行者の竿先に小さなアタリが続いていたが、食い込むようなことはなかった。とって返して砂浜に立てかけていた竿を片付け、浜厚真漁港に移動した。一人分のスペースはまだ空いていた。

先行者のフラシには更に45cmほどのものが1枚追加されていた。先ほどから続いていたアタリをものにしたらしい。勇んで竿を設置したが、私の竿にはアタリが出ることはなかった。

浜厚真漁港内で大チカを鈴なりにしている釣り人がいたので様子を聞いた。その脇には3本の投げ竿が出されていた。「投げ竿の方のアタリもさっぱりなくなり、岸壁の縁にチカが群れをなしてきたので、チカ釣りに変更したらこのような有様だ。」とバケツに半分ほどたまった大チカを指し示した。そして、「朝方は型のよいクロガシラが釣れた」とこれも岸壁に吊されたフラシを指差した。その御仁に断ってからフラシを上げてみると45cm程のクロガシラ2枚が鱗を打っていた。自陣に戻って、5cmほどの間隔にした竿先を見つめたが、寸部と変わらず元のままで、少しの糸ふけも出ていなかった。

地元の釣り人がやって来て防波堤の付け根で竿を出し始めた。「先週の月曜日は、ここがよかった。小型が多かったが自分は10枚釣った。更に付け根寄りに入った人は15枚釣っ

た。」と竿4本を設置した。私の竿にはアタリが出ていない。

私の右隣りのスペースに、男性1名、女性1名が竿を1本ずつ出した。女性の方は昨年、旧菱中造船所で知り合ったご婦人だった。男性の方もこの釣り場の常連だと思われる。親しく釣り談義をしながら過ごすことが出来た。その間も私の竿先にはアタリの気配さえもなかった。

夕闇が迫ってきた。今日の朝方から12時間ほども釣りをしているのだ。しかし、私は魚の顔を拝めていない。だが、時間はたっぷりあるのだ。なにせ、今日からサンデー毎日なのだ。明日もここで竿を出していることも可能だろう。そう考えていると竿先にチョココン、チョココンと小さなアタリが出た。クロガシラの大物の前触れと竿尻に構えて待ったが、竿を引き込むこともなくアタリがなくなってしまった。竿を上げてみると海藻に絡まって大チカが15号のカレイバリに付けたイソメに食いついていた。投げ釣りにチカとはねえ・・・。

疲れてきてしまった。毎日サンデーで釣り三昧の身分になったにも関わらず、明日まで釣りを続けていく気力がなくなってしまったのだ。午後10時に竿を片付けたが、私のフラシに収まったのは、手の平級のクロガシラ2枚とチカだけだった。

翌朝、サンデー毎日の初物は煮付けにされた。朝酒の肴にするには少々味が濃すぎたが、どんぶり飯のお供には十分すぎるほどだった。今日もサンデーだ。朝酒が効いてきて横になると、夢の中で釣りをすることになった。



サンデー毎日の初釣果

岩見沢釣遊会第1回大会

退職後、部屋の模様替えをすることになった。山積みになっていた仕事関係の書籍や小説類を全て段ボールに詰めて廃品回収に出した。そして、スッカラカンになった書棚には釣り道具を運び入れた。これからは自分の部屋で思う存分仕掛け作りに精を出すことが出来るのだ。

教員向けの詐欺が横行していると新聞に出た。「貴殿がいじめや体罰、セクハラに関わっているのではないか」という投書があった。教育委員会やマスコミにこの話を持ち込んだらどういうことになるか。指定された講座に30万円振り込めば、穏便に事を進める」という恐喝まがいのものだ。私が現役の時にもそのような文書が封書で送られてきたことがあった。職場で問題にしたところ、他の職員にもその内容は違っても同じような文書が送られてきていることが分かった、自分にやましいことがある者は、振り込んでしまったということも聞こえてきていた。退職後まもなく、私も、インターネット上のワンクリック詐欺に引っかかるころだった。現職中であれば、勤務に忙殺されて考えるゆとりもなく、簡単に騙されるころを、退職後でもあって危ういところで難を逃れたのだ。

4月19日、平成27年度岩見沢釣遊会第1回大会が須築港～瀬棚港で開催された。天気予報では波が1m以下となっており、私は久しぶりに島歌川河口で釣りをする予定でいた。風の時にいった島歌ではいつもいい思いをさせてもらってきたのだ。

島歌川で一旦バスを降りて波の状態を確認してみた。波が思ったほどでもないので予定通りここで竿を出すことに決定した。岡氏も一緒に下りて大きなゴロタ場で竿を設置した。私は足腰に自信がなくなってきたのでゴロタ場ではなく、舟揚場の脇に三脚を設置した。しかし、見た目以上に波がある。そして、時折大きなうねりも押し寄せてきた。Wゴロバリで竿3本とも近投にしていたのだが、そのうねりのために3本とも根掛かりさせて仕掛けを失った。新しい仕掛けに取り替えてもう一度、同じように振り込んだ。しかし、またまた3本とも根掛かりさせてしまった。2本を遠投にしてみるとなんとか抜け出てくる。ゴロ1本で中投してみたがこれも抜け出てくる。しかし、アタリはまだ1度も出ていない。岡氏の様子を見に行くと同じように根掛かりで苦戦しているが、最後までここで頑張るといふ。

3時間経過した。とうとう岡氏も諦めたようだ。二人して吹込漁港に向かってとぼとぼ歩き出した。漁港の左に付いた細長い平盤を見ると、岩盤上を波がサラサラと伝っていく程度でやれると判断した。岡氏はテトラの上に荷物を置いてから先端まで出て行った。そして、中間辺りで立ち込み用三脚を設置して打ち始めた。私は安全のために岩盤の根元で竿1本だけを手持ちにして打ち始めた。

大きなうねりが襲ってきた。私は踝ほどの波に足が掬われて危なく転びそうになった。岡氏は平然と2本の竿を出している。しかし、岩盤上に置いてあったもう1本の竿が流されてしまったという。リールも付いていたので後ろの溝に落ちたのだらうと探し始めた。一緒にライトを当てて探すが見あたらない。溝には長い海藻が揺れ動きその陰にでも隠れているのだらう。まだ購入したばかりのサーフランダーだった。

明るくなってから再度捜すことにして、移動することにした。岡氏にすれば後ろ髪を引かれる思いだっただろう。今度は、漁港の右に付いた大きな平盤に出てみた。ここは、沖に離れ防波堤がある所為か波はほとんど無かった。岡氏はその右先端に出て遠投し始めた。私は、岡氏の右にある大きな離れ岩との間の溝にゴロネット仕掛を近投し、離れ岩の右に遠投した。



平盤右角の岡氏。私は平盤前の離れ岩との間で竿を出した。

岡氏にホッケが2本立て続けに来た。私には1度もアタリが出ない。あちらこちらと彷徨っているとリュックに2羽のカラスがとまっていた。大声で叫んで慌ててリュックを置いたところに戻ると、ポケットの隙間にカラスが頭を突っ込んだらしく、酒のつまみを入れたビニル袋に穴が開いていた。つまみの下に置いたおにぎりには被害がなかった。くちばしが届かなかったのだろう。しかし、仕掛入れの口が開かれていて、ビニル袋に入れた仕掛があちこちに飛散して平盤上に残った海水に晒されていた。真水で洗って乾かすしかないだろう。

明るくなってきたので、岡氏が流された竿を探しに漁港の左に向かった。しかし、竿は見つからなかったようだ。ションボリと帰ってきた。

向かいに見える防波堤先端で釣っていた釣り人にホッケが釣れ続いていた。そして、帰り支度をはじめたその御仁がスカリを上げた。スカリにはホッケが満杯だった。それを見て、今度は防波堤の向かい側にあたる平盤の左端に移動した。投げた途端にアタリが出て、ホッケがカツオに食らいついてきた。ホッケが4本になった。後は嫁である。ホッケの合間に、アカハラがゴロに食いついてきた。今日はひどい目にあってきたがなんとか形が付いた。

私の横に並んでいた岡氏がペンチはないかと近寄ってきた。釣りバリが指先に刺さってとれないので、ハリ先を切って欲しいというものだ。今までにない大物ホッケが釣れたので、慎重にハリを外していると魚が暴れて海に帰ってしまい、ホッケの代わりに自分の指釣ってしまったというのだ。ハリ先を切るには相当な力が加わって傷口を広げてしまいそうだ。まずハリスをチモトで切った。次ぎにかえしの付いたハリ先側をペンチで挟み、抜く向きを反対にして引っ張ることにした。「1, 2, 3のかけ声で一気に抜くから」と岡氏に声を掛けて、1と声を出したところで一気に引き抜いた。2と3の息詰まる緊張を解いてやったのだ。幸い、傷口は広がらずに、血もあまり出ていない。海水の消毒だけでなんとかなるだろう。



平盤の左角で私の横に並んだ岡氏

審査は須築港で行った。オホンドマリや島歌の平磯に入った会員は根掛かり等で苦勞した。瀬棚漁港組は、比較的穏やかな天気に加えて先日までの時化していたために港の中に魚が入っていたらしく良い成績を取めた。

優勝は、前野氏で、43.2cmのアブラコ、39.5cmのカジカなど大釣りしてきた。準優勝は47.1cmのアカハラと34.5cmのクロガシラをものにした嵐氏だった。今大会では会長が2名の臨時会員を瀬棚港へと案内した。北野亮太君は婿のアカハラが43cm、そして、大釣りしてきたアブラコの中から4本を選んで審査に出して3位に入賞した。木村源太君は、釣果が4本だったがそのどれもが大物で、47.5cmのアカハラで身長賞を獲得した。二人ともエサはイソメのみということだ。二人とも若さにあふれ潑刺とした好青年だった。



左から3位：北野亮太、優勝：前野達志、身長優勝：木村源太